

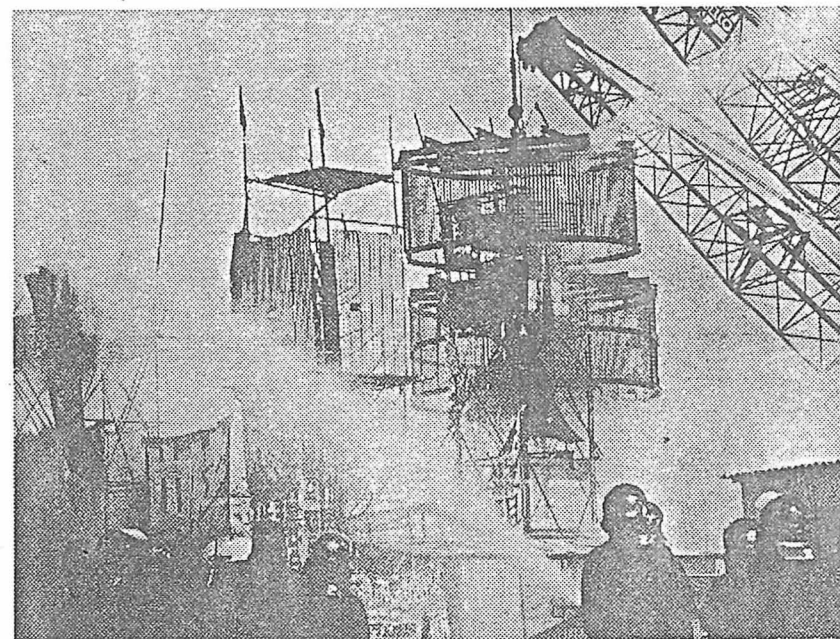
1980's

15

橋爪大三郎
社会学者

ピンボケ空振りのサヨクに 巻き返すチャンスはあるか

この社会を造りかえようというのだから、どうしてもエリート主義になる



さっさと左翼の陣営から逃亡した。八〇年代左翼は、その出がらしみたいなもの。まだ左翼をやっているなんて、①並外れて鈍感なのか、②既得権にしがみつくよほどの悪か、③要領の悪いとびきりのお人好しか。左翼はとっとと消えてなくなれ、だけれども、善良なお人好しを悪しざまにのしるだけじゃ、ちと気の毒。ちゃんと引導を渡さなければ、浮かばれまい。

やることなすこと、左翼がピンぼけ空振り続きの続いたのはなぜなんだ？そこをはっきりさせるには、政治のあり方から押さえていくのがよい。

じゃあまず、政治とは何か。私の思うに、**「大勢の人間をいっぺんに拘束してしまおう事柄を決定する」**のが政治の本質である。たとえば、どこに橋を架けるか、誰からいくら税金を取るか、みたいなこと。

自分のこと(どこに住もう、何を買おう、……)なら、誰でも自分で勝手に決められる。そういうのは政治と言わない。ひとりでは決められない、複数の人間の行動を束縛することを決め

1990.4.20

76

るのが、政治だ。そう思って見回してみると、政治はごくありふれていて、家族の中や、ちょっとした集まりにも必ず見つかる。国会で法律を定めたり、予算を決めたりするのも、もちろん政治である。

さて、政治には、いろいろスタイルがある。たとえば伝統社会では、長老や王が大事なことを全部決めたりする。そうではなくて、民衆(関係者の全員)が自分たちのことを決めるのを原則にすれば、民主主義だ。

ところで左翼だが、彼らは政治に関して、独特のスタイルをもっている。

フランス革命の頃、国民公会で議場の左側に席を占めた人びとを、「左翼」と呼んだ。彼ら

は革命の機に乗じて、財産の平等化をはかるなど、社会革命を推し進めようとした。以来、連綿と続く左翼の特徴を、次の三点にまとめてよからう――。

①弱者(民衆)の味方になる。
②現状よりぐんとましな、理想社会の青写真を描く。
③その理想を実現するため、民衆を指導し、社会を改造する。

ブランはなかなか結構だ。うまく行けば、民衆が泣いて喜びそうさ。

ただ、左翼の場合、意識的、理性的にこの社会を造りかえようというわけだから、どうしてもエリート主義になる。一般の民衆よりひと足先に、理想社会を見通すのが左翼の役目。で、難しい言葉をすぐ使いたがるし、

とかく説教臭くなる。(もひとつご注意。エリート主義だからと言って、実際にエリートの集団とは限らない。例えば日本のエリートはあらかた自民党に集まってしまい、社会党などは人材不足で、候補者選びも思うにまかせない)

労働者の生活はマルクスの予想に反してどんどん向上した

いた資本主義批判を展開。社会主義・共産主義への道が、歴史の必然だと主張して、革命運動の主導権を握った。

ところで、マルクス主義の用語は、生産や労働からすべてを語る仕組みになっている。(労働)の価値、再生産、疎外、物象化、階級闘争、……みんなそうした概念だ。ちようどプロレタリア(食うや食わずで働く工場労働者)のものの見方にびつたりにできている。

ところが、経済(と言わず、人間の社会活動)は、生産だけで出来ているわけじゃない。もうひとつ、大きな領域として、消費もある。生産と消費をバラ

物を作るよりも売るほうがむずかしい社会。生産(供給)能力過剰の社会である。

似たような商品が、店頭にあふれている。そこで商品は、本来の機能と関係ない、細かな差異をもって、消費者の気を引こうとする。消費者のほうでも、商品のデザインや広告の与えるイメージを手がかりにして、ものを買う。こうなると消費は、「労働力の再生産」なんかでなく、独自の論理をもった現実に育ってくる。商品にまつわるイメージは、根拠のない幻想(上部構造)ではなくて、社会を動かす現実になる。

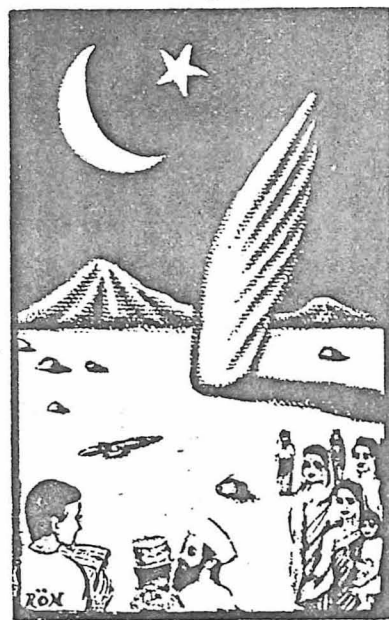
こういう消費社会のあり様をうまく記述できるのは、記号論のチームであって、決してマルクス主義のチームでない。マルクス主義は、あくまでリアリズム(実物主義)だから、記号や意味はそこから派生すると考える(反映論)。それに対して、ソシュール以来の記号論・レヴィ・ストロース以来の構造主義は、根拠のない差異と対立から、意味や価値が現れると説く。

マルクス主義を下敷きにしていては、消費社会の現実をくっ

77

1990.4.20

1980's



イラスト・伊藤桂司

ぜんぜん提出できなかった。それもこれも、マルクス主義の硬直した発想にがんじがらめになっている、現実がへしやけて見えているせいだろう。

マルクス主義は、よくできた包括的な思想である。この世紀あまり、左翼に圧倒的な影響を与えてきた。ことにマルクス経済学を踏まえて、パンチの効

の時代には、労働者の消費生活はみじめなものだったから、『資本論』はその辺をあっさりすませてもよかつたのである。

その後、労働者の生活は、マルクスの予想に反してどんどん向上する。日本も七〇年代には、消費社会に突入した。

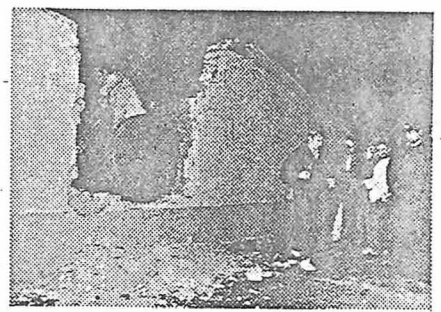
消費社会は、どんな社会か。ひと口で言うなら、それは、

きり捉えることなどできない。いつまでも賃上げ・スト権にこだわった労組や社会党が、ジリ貧になったのも当たり前だ。

こうして、八〇年代を通じて低迷を続けた左翼だが、ここへ来て、風向きも変わりつつある。海の向こうでは、ソ連のペレストロイカ、東欧の民主化が引き金となって、半世紀ぶりの地殻変動＝構造調整のうねりが渦巻いている。ヨーロッパでは共産党が軒並み腰砕けとなり、「人間の顔をした」社会民主主義がコンセンサスを得ようとしている。入れ替わりに、八〇年代をリードした新保守主義の盟友たち——中曽根元首相も、レーガン、サッチャーも、それぞれ落日を眺めている。

八九年は、長期低落傾向をたどっていた、いや、死に体との声すらあった日本社会党が、息を吹き返した年でもある。ほかにめぼしい対抗馬もないからと、半ばやけくそで委員長に選ばれた土井たか子氏だったが、ここへ来てあの異常人気。参議院で保守逆転の余勢をかって、衆議院でも大幅に議席をもち返した。いったいどういう風の吹

き回しか。思うにこれは、社会党が左翼でがんばれという意味ではなくて、その反対。つまり、左翼を脱皮することへの期待だろう。労働組合もイデオロギーももう結構。これからはもっと現実的になって、自民党じゃできない政治改革に取り組んでおくれ。そういう願望が膨らんでいる。この人気は、社会党の実態とかけ離れている。あわてて「社会主義革命」の看板を下ろしても、組織体質は古くさいし発想も硬直したまんな。ここをどうにかしないと、ブームもすぐにしぼむのは目に見えている。



去年秋のベルリンの壁崩壊によって、ヨーロッパでは共産党が軒並み腰砕けとなった

八〇年代、ずっと私は「社会党消えてなくなれ」論だった。そのほうが、日本の政治のためによい、と考えたからだ。ところが意外にも、枯れ木に花の狂い咲き。そこであっさり「社会党復活」論に宗旨変えた。老舗の看板は大切にしよう。そして中身を大改造、人間も入れ替えて別な政党に作り変えよう。新しい政党をこしらえるより、そのほうが話が早そうだ。

社会はこうあるべしと勝手に決めてこんでいる
これが左翼の悪い癖

非武装中立とか、原発反対、韓国の政権は認めないとか、社会党が後生大事にしている政策がある。けれども、誰がそんなこと頼んだというんだろう。民衆の希望と関係なく、社会はこうあるべし、みたいに勝手に決めこんでいる。これが左翼の悪い癖。それも、いい考えならまだしも、出来の悪い大学生の答案みたいな政策では、有権者もあきれしてしまう。

よく考えてみると、左翼であることと、民主主義とは矛盾する

る。民主主義なら、どういう政策をとるかは、民衆が討論してから決まるわけだから、最初は白紙だ。ところが左翼は、それを最初から決めてかかる。ずいぶん失礼な話じゃないか。

社会党が本気で政権をめざすなら、これまでの政策はいちおう白紙に戻したい。指導部も上から下まで、全部選挙し直そう。そうやって左翼を脱皮できれば、九〇年代をリードする政党になれないとも限らない。

八〇年代左翼の退潮を、どう分析できるだろうか。

ひとつの要因として、コンピュータに注目してみよう。コンピュータはリアル・タイムに大量の情報を処理する。その昔の第一号機は、ばかにかい真空管の塊だったが、以来、着々と改良が重ねられ、桁違いに安価で小さくなった。八〇年代はそれらがOAやワープロとして至るところに普及していく一〇年だった。労働の質はそれにもなって変化し、市場の分権的なコントロールの効率も飛躍的に高まっている。

左翼は、理性で社会をコントロールすることを売り物にして

きた。しかし理性の(結局は人間の)能力にも、官僚組織の能力にも限界がある。コンピュータで武装した競争市場は、計画経済とは比較にならない効率を発揮する。資本主義社会は左翼が考えたよりも、どうやらずっとよくできたメカニズムらしい。分権的なのは欠点でなく、むしろ利点のようである。だから分権的な原理(政治的自由・民主主義と、経済的自由・市場経済の組み合わせ)を、世界中で民衆が選択したのだ。

こうして左翼の退潮は決定的だが、将来巻き返すチャンスはないのだろうか。

九〇年代は、東西対立の終焉した、多角的な調整と模索の時代。そこでは、南北の対立や地球・環境問題が、改めて浮上してくる。これは、競争市場・分権システムの論理で克服していく問題だ。それをうまく、分権システムのなかで代表できる主体がみつからないからである。そこでもう一度、社会主義原理(さきの①②③)が、見直されるかもしれない。いや、必ず見直されるはずだ、とのべておこう。